
バカと居眠りとAクラス

nature

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと居眠りとAクラス

【Zコード】

Z7700Y

【作者名】

nature

【あらすじ】

学園居眠り時間歴代最高記録を1年で塗り替えた男「緑野 魁人」。

。 その男がなんで学年次席？！

幼馴染の佐藤美穂、親友の明久、雄一らと繰り広げる学園ラブコメディー！

どうぞお楽しみ下さい！……楽しませられるかなあww

Aクラス中心でやってくつもりなのでFクラスはあまりだせないかも…。

初投稿なので変かもしだれませんがよろしくです！
作者は受験生なので更新は不定期です。
加えて作者の自己満小説になる可能性があります。
嫌だ！つて人はお戻り下さい。。

♪♪♪（前書き）

はじめまして。naturieです。

初投稿になります。どうぞよろしくお願いします。

ふるわーぐ。

春。　　ここ文月学園ではクラス発表が行われていた。

「ふわあ～。…眠いなあ…。」

万年居眠り男「緑野 魁人」は大欠伸をしながら学園内を歩いていく。

「…先生を無視してどこへ行く。自分のクラスが知りたくないのか？」

生徒から「鉄人」と呼ばれ恐れられる補修教師、西村が血管を浮き上がらせながら言つ。

「…おはようつす。」

「明らかに嫌な顔をするな。ほら、振り分け試験の結果だ。」

魁人は封筒を受け取り、空けようとする。

「実は、先生はお前を1年間見てきて「こいつは吉井と並ぶFクラス候補なんじやないか？」

と思っていた。授業は居眠りテストも真面目に受けてなかつたらな。」

やつと封筒を開け終わり中身を見る。

「緑野 魁人 Aクラス 次席」

「どうやら先生が間違っていたらしい。すまなかつたな。」

「いや、悪いのは俺の生活態度ですから。謝んなくていいですよ。
じゃ、俺行きますね。」

「ああ。出来れば居眠りはもつやめろよ」「無理っす。」…即答か。

「じゃ、残り頑張つて下さー。」

そう言って魁人は昇降口へ向かった。

これから魁人のAクラスでの学園生活が始まる・・・。

ふるわーぐ（後書き）

記入していますが、更新は不定期です。
ご了承下さい。

主人公紹介！

名前 緑野 魁人（みどりの かいと）

性別 男

身長 175cm

体重 62kg

見た目 顔は中性的。つてかどっちかというと女子。だがなぜか女子に見られることはない。

髪は愛子を少し長くした感じの茶髪。

体型はちょっとやせてるかな？ぐらい。

性格 基本優しい。でも眠気によつて機嫌が悪くなつていく。眠いときに誰かに寝るのを邪魔されるとブチ切れる。友達や弱い人をいじめる奴は大嫌い。そのときもブチ切れる。また、かなり面倒くさがり。でもやる時はやる。やつていいことと悪いことの区別をしつかりつけていく。

得意教科 数学（真面目にやれば1年の時毎回余裕で1位をとれた
ぐらい）

苦手教科 英語（勉強する意味がないと感じているから）

召喚獣 そのまま小さくした感じ。

服は剣道の胴着、袴。

武器は竹刀。特別な効果があり、

基本どこを打つてもダメージは低いが、

面、小手、胴、突きの位置（頭、両手、腹、喉）を的確に

打つと

相手の元々の点数の半分のダメージを与える。つまり、2回的確に打つたら相手は補習行き。

腕輪 もう決めてあります、秘密です。

A対Fが終わつた辺りで更新するつもりです。

その他 中学まで剣道をやっていた。同じく中学で剣道をやつていた（という設定）の須川と知り合い。何回か試合をしたこともある。

しかし、足に重大な怪我をしたため、

今は文月の剣道部のコーチを気が向いたらしている。

美穂とは保育園からの付き合い。

明久は小学校、雄一は中学校で出会つた。

雄一と初めて会つたときに…？

自分以外への恋心には敏感だが、自分がもてると思つていないため、

自分に関してはかなり鈍感。

1人暮らしのため家事は大体できる。

どうせ食うならうまいものが食べたい、という理由で料理は異常にうまい。

居眠り時間学園歴代最長記録をもつてゐるが、頻繁に更新されるので、

正確な記録はわからない。

第1話 設備で重視する「」。

「そういうえば、あいつは『』のクラスになつたかな……」

魁人はAクラスへあるきながらそう呟いた。

「おっ、ここか…でかいな。」

入つたAクラスには教育施設とは呼べないくらいの設備が揃つていた。

リクライニングシート、個人エアコン、冷蔵庫、パソコン etc

…。

「あつ、魁人くん！」

誰かが魁人に気づいたらしく、走つて駆け寄つてきた。

「ん？ お、美穂か。お前もAクラスに入れたんだな。」

走つてきたのは先ほどの「あいつ」こと幼馴染の「佐藤 美穂」だつた。

「はい。魁人くんと同じクラスになりたくて、頑張つて勉強しましたから…。」

「へえ～、そいつは殊勝なこつたな。ま、1年よろしくな。」

魁人は前半部分の意味を理解していないうでそう答えると、

「はい…。そういうえば、この教室って大きいですね…。」

少ししおげでいる美穂は教室を見渡しつつ、いつ言った。

「ああ、そうだな。」

普通の人ならばここで「勉強しやすそう」とか「快適そうだよな」とか言いそ่งだが、それに対して魁人は

「寝やすそうだ。」

「…教室に関しての感想がそれですか…。」

学園居眠り時間歴代最高記録男はそう答えた。

てつ経し少かられそ

「皆さく、席についてトモ。」

クラス担当の高橋が教室に入り、そう告げる。

「ん？ 時間か。」

そうは言つても席に座つて話していたので動くことは無い。

ちなみに魁人は偶然席が近かつた美穂と話していた。

「そうみたいですね…。」

「では、自己紹介をしようと思います。廊下側の人からお願ひします。」

「あつちからか…。」

ちなみに魁人の席は窓側から2番目なので、結構後半の方になる。

「…自分の番まで寝てるから、順番が来たら起こしてくれるか？」

「はあ…、仕方ないですね。」

魁人は美穂にそう告げ、3秒で寝る。

「…人くん。魁人くん。次ですよ。」

「…ん？ そうか。ありがとうございます。」

魁人は寝ぼけ眼をこすりながら笑顔でそう言つ。

「いえ…／＼。」

美穂は少し顔を赤くし、前を向く。

美穂の席は魁人の右隣である。

「さて…、俺の番か。まあ、対して特別なこともないが…。」

前の人気が終わり、魁人は立ち上がる。

「俺は緑野 魁人。好きなことは寝ることだな。1年間よろしく。」

「

魁人はそう皆に告げるとすぐ席に座る。

「俺の番も終わつたし、また寝るか…。」

そうしてまた魁人は眠りについた。

「…何であいつが…？」

クラスメート達がそう呟き始めた頃にはもう寝息を立てていた。

第1話 設備で重視するJRP。（後書き）

いきなり「メント」がきて驚きました…。

餓鬼さん、本当にありがとうございました！

感想など書いて頂けると作者は気が狂う程喜びます。

今回見て下せつた皆様、出来れば次回も読んで頂けるとありがたいです。

感想、アドバイスなどお待ちしています。

では、読んでいただき、ありがとうございました！

第2話 代表さん達と顔合わせ！（前書き）

ちよつと一話一話の文字数が少ないかな？ついこの頃思っています。

第2話 代表さん達と顔合わせ！

「……ん？自己紹介、終わったのか…。」

全員の自己紹介が終わり、5分ぐらい経つて、魁人は起きた。

「……ちょっとといい？」

「ん？いいけど…あんたは？」

「……私は霧島 翔子。学年次席つてあなたで合ってる？」

このクラスの代表であり、学年主席である「霧島 翔子」が魁人に確認をとる。

「一応、そうらしいな。霧島さんが主席？」

「……そう。でも、あなたが次席になるとは思わなかつた。」

「ま、田頃の生活態度はいいとは言えないし、テストも適当だつたからな。」

魁人も確認をとり、翔子は肯定する。

翔子もまさか魁人が次席になるとは思わなかつたらしく、驚いている様子。

「まあ、1年間、よろしく。」

「……よひしへ。」

魁人が自己紹介のときと同じことを言つと、翔子は目的を果たしたらしく、自分の席に戻つていった。

「へえ～、キミが次席なんだ。ボクはてっきり次席は久保くんだと思つてたよ。」

「僕も、次席はもらつたと思ってたけどね。まだ、甘かつたみたいだ。」

「…あんたらは？」

今度はボーイッシュな感じの女子と、眼鏡をかけた知的な男子が魁人に声をかけてきた。

「ボクは工藤 愛子。ヨロシクね。」

「僕は久保 利光だ。よろしく頼む。」

「ああ。緑野 魁人だ。よろしくな。」

魁人は「工藤 愛子」と「久保 利光」と自己紹介をすませる。

「ホントは優子もつれてこよつと思つたんだけど…。」

「今は自薦したいらしいね。」

「眞面目だな。そいつは。」

愛子は「木下 優子」もつれてきたかつた、というが、自習をしたい、と断られたらしい。

「まあ、いきなり自己紹介から寝てる緑野くんからしたら皆眞面目かもね。」

「…嫌味か？」

「そんなことはないけどね。ただ、結構有名だよっ・緑野くん。」

「そうなのか？」

愛子はいたずらっぽく魁人に言つと少し顔をしかめて答える。

そして、魁人は結構有名だといつ。

「魁人君は知らないのかい？」

「何をだ？」

久保も知つているらしく魁人に言つ。

「魁人君は、1年で学園居眠り時間歴代最高記録を塗り替えたって有名なんだ。」

「…なるほどな。」

「だから、その魁人くんがなんでAクラスに入れるのかつて、皆不思議みたい。魁人くんの自己紹介の後、皆ちょっとそれで騒いでたけど…。」

「俺は自己紹介が終わつたあとまたすぐ寝たからな。」

久保は魁人が有名な理由を話し、愛子が、魁人の自己紹介のあとざわついたのはそのせいだと囁く。

「まあ、今次席になつてることとは十分な実力があるつてことだよね。」

「そつだううね。まずは縁野君を目標にやらせてもうつよ。」

「はは、まあ頑張つてくれ。じゃあ、俺はちょっと廊下に出でくるわ。」

「うん、行つてらっしゃい。」

愛子と久保が魁人の実力を評価すると、魁人は少し微笑みつつ返し、廊下に出でくるといつ。

「ああ、行つてきます。」

「ん？あれは…。」

魁人は知つた顔を見つけたらしく、声をかけようとする。

「おーい、明久、雄一！」

「ん？」

「あ、魁人君！」

魁人は親友、「吉井 明久」と「坂本 雄一」を見つけ、近付く。

「よう。お前はどこのクラスになつたんだ？」

「てっきり僕らと一緒に思つてたけど。」

雄一が何クラスになつたか聞くと、明久は魁人の実力を知らないため、同じFクラスだと思った、という。

「おいおい、おまえらと一緒にするなよ。」

「で、どこなんだ？」

「Aだ。次席になつた。立派なもんだわ〜？」

「へえ〜。…ってAで次席? ! うそお? !」

魁人がA、学年次席というと明久は飛び上がらんばかりに驚く。

「やっぱりな。1年のこりからおかしいと思つてたんだよ、お前があの成績なのはな。」

雄一は予想がついていたのか、あまり驚かない。

「へえ～、お前にはお見通しだつたつてわけか。」

「そういうことだ。…おっと、先生が戻ってきたみたいだ、俺らは戻るぞ。」

「ああ、じゃあな。」

「またね～。」

FクラスはまだHRが終わってないらしく、2人は教室に戻つていった。

「…で、なんであの先生は机を持ってきてんだ?…まさかな。」

魁人はFクラスの担任らしき先生が、机を持ってきているのを不審に思つたが、まさかそこまでボロくないだろう、と思い「机がもう壊れたから」という考えを頭から消した。

「…さて、そろそろ戻るか。」

そう言つて魁人は新校舎、そして教室へと戻つていった。

第2話 代表さん達と顔合わせ！（後書き）

魁人はなんとなく散歩で旧校舎まで行っていました。

またコメントを頂きました！

紫苑さん、本当にありがとうございました！

第3話　血盟ついて覚めたための時間でしょう？（記書き）

明日期末テストです。

え？ 勉強？ 何ソレおいしい？（殴

第3話 自習つて寝るための時間でしょ？

「はあ？ 自習？ 初日からか？」

「そうみたいですね。なんでもFクラスがDクラスに試召戦争をしがけた、とかで…。」

魁人が教室に戻ると、美穂が今日は自習だと言つたらしく、驚いた様子で言つ。

「雄一… いきなりか…。」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっととな…。」

(あいつのことだからな…。A前のちょっととした仕掛けつてとか…。)

魁人は理由に心当たりがあるらしく、雄一の名前を呟く。

「まあ、自習なら堂々と寝れるしな…。」

「…魁くん、自習は寝る時間じゃありませんよ…。」

自習だと分かつたら魁人はすぐに居眠り宣言をする。

「自習なんですから、少しは勉強したりどうですか？」

「ん…。課題は出てるか?」

「出でます。プリンスト3枚だけですけど…。」これを今日中にやれつて。」

美穂に言われたため、課題だけはやろひと思つたのか、課題はあるか聞く。

「教科は?」

「全部数学です。」

「数学か…。ちやつちやと終わらじして寝るか…。」

「…結局寝るんですね…。」

教科を聞き、終わらせたあとやはつ寝る返りじへ、美穂はため息をつく。

「…よし、終わった。」

「え?ーもう終わったんですか?ー」

始めて3分程でもう終わつたらしく、寝る体制に入る。

「あれ？ 總野くん？ 寝るなら課題終わらせてから…。」

「…もう終わつてます。」

「え？…ホントだ…。」

愛子が魁人が寝ようとしているのに気づき、声をかけると美穂が魁人のプリントを見せる。

「本気だしたらこんなもんだ…。基本の確認程度だつたしな…。」

「だつて言つても…。代表でもこんなに早く終わらないよ…。」

愛子が翔子の方を見ると、翔子でもまだ一枚目がやつと終わるとこうだつた。

「本当に人間かどうか疑っちゃうよ…。」

「…ですよね…。」

愛子と美穂はため息をついて魁人を見るともう眠りに落ちていた。

「でも、緑野くんつて寝顔かわいいよね こうじてると女の子みたい」

「え？！／＼／＼そ、そうですね…／＼／＼

愛子が魁人の寝顔を見てそう言つと、美穂もそれを見て顔を赤く

する。

「ん？ その反応…。なるほどねえ」

「な、なんですか？！」

「い、いや、なんでもないよ じゃあボクは戻るねえー」

愛子はおもしろいものを見つけた、とこつぶつに笑うと、自分の席に戻つていった。

「もひ…。さて、私も課題を終わらせないと… // /

美穂は課題を終わらせようとするが、魁人の寝顔が気にならしく、なかなか進まなかつた…。

「ん、 美穂か。 お前はまだ帰らないのか？」

魁人が起きたのに気づき、 美穂は魁人に声をかける。

「はい…。あの、 よかつたら、 なんですけど…。」

「ん? どうした?」

美穂は何か頼み? があるらしく、 魁人に言いつ。

「…一緒に帰りませんか?」

美穂は顔を赤くしつつ、 そう魁人に言いつ。

「ん、 別にいいぞ。 保育園からの付き合いなんだから、 そんな遠慮することないだろ。」

ただ、 魁人は友達感覚で言つてていると思つていてるらしく、 そう答える。

「 そうですよね…。 はあ…。」

美穂は魁人が自分をただの幼馴染だと思っていてると思つたらしく、 ため息をつく。

「ちょっと緑野くん。 そういう態度は感心しないなあ。」

「ん? 工藤さんか。 どういづことだ?」

そこへ愛子が声をかけてきた。

「どういって…。魁くん、美穂ちゃんが幼馴染だからうつただそれだけの理由で誘つたと思つてゐるの?」

「ああ。他にどんな理由がある?」

「はあ…。これは思つてた以上に強敵だね…。頑張つてね…。」

「はい…。わかつてましたから…。」

愛子は魁人の返答に少し呆れ気味に言つて教室を出て行つた。

「? なんなんだ?…まあいいか。美穂、帰るぞ。」

「あ、はい!」

魁人は意味がわからない、といふように首をかしげると美穂に声をかけ先に教室をでていく。

美穂もかばんをもつて、すぐ後を追いかけていった。

第3話 血腫つて寝たための時間でしょう？（後書き）

タグで主×優子とか書いといて全然優子が出せない…。

つ、次は出せると思います！

次も読んで下されると嬉しいです！

それではー、お読み頂き、ありがとうございましたー！

第4話 下校中つて何か起ひる確率高じよね。

「しかし、今日の魁くんの課題の早さには驚きました…。」

「まあな。1年の頃を知つてゐやつなら既にいたりだらう。」

只今、下校中。

「でも、美穂は俺のことよく知つてゐんだから、そんなに驚くことでもないだろ。」

「あそこまで早いとは思いませんよ…。試験で数学何点だつたんですか？」

「忘れた。腕輪は余裕でとれてたけどな。」

「…400点が余裕つて時点でおかしいと思つたんですけど…。」

「そうか?……ん?」

魁人は何か見つけたよう歩くのをやめる。

「どうかしましたか?」

「…悪いけど先に帰つてもうえるか?」

「え?」

「明日に繰り越しつて」とで…。」

「まあ……いいんですけど……。それじゃ、また明日。」

「ああ、悪いな。」

魁人は美穂を先に帰すと、改めて「何か」の方を見る。

「……やっぱ、人助けはしどべきだよな。」

魁人は走つて「何か」…。助けるべきと判断した所へ向かう。

「なあ、ちょっとだけだつて。一緒に樂しいことしようぜっ。」

「嫌だつて言つてゐるでしょ……！」

「ちう、しうがねえ、力づくでいくか…。」

「え？ ちょ、ちょっと……。」

チンピラ風の男達3人がある女子1人を囲み、迫つていく…。

「…つたく。そんなことしてて恥ずかしくねえのか？」

「ああ？…ぐあつ…！」

「おい、どうした…ぐつ？！」

チンピラの1人が手を伸ばしたとき、不意に鈍い音が響き、その男は倒れた。

更に次の瞬間には、もう1人、地に倒れていた。

…そこには黒の木刀を持つた男子が立っていた。

「な、なんだお前は？！」

「ああ？てめえいら」ときに名乗る名前なんざねえな。俺に勝てたら教えてやるぜ？」

「てめえ、なめやがって…！」

「…屑が。」

そう呴いた瞬間、最後のチンピラは倒れていた。

「…怪我はないか？」

「え、ええ。大丈夫。ありがとう。」

「それはよかったです。」

ガヤガヤ…

「おい、あの黒刀、もしかして…。」

「ああ、あの強ヤ…。」

「あの悪鬼羅刹と互角にやりあつたつていつ…。」

「」の戦い（リンチ？）を見ていた人々は男子の正体に心当たりがあらしぐ、口々に呟いている。

「おつと、目立ちすぎたな…。じゃあな！」

そういうて男子は笑顔を残し去つていった。

それを見た助けられた女子は

「…かつこいい／／／」

と顔を赤くしていた。

「つたぐ、また目立つちまつたな…。」

「よう魁人。また噂されるよつになつたな。」

「…茶化すなよ、雄」。

「まったく、困った人を放つておけないってのは不便だなあ？」

「…まったくだよ。お前との一件のせいでのもつ田立ちたくないつて思つてたんだがな…。」

翌日。

「おはよ～。」

魁人は教室に入る。

「おはようございます。」

「おはよう、緑野くん。」

「やあ、緑野くん。」

美穂、愛子、久保があいさつをかえす。

「緑野くん、今日も眠そうだね～。」

「いくら寝ても眠気がとれなくてな…。」

他愛もない話をしていると、魁人の後ろからもう一人入ってきた。

「あ、優子。おはよう。」

「優子、おはよう…。あー…あなたは?…」

「ん?」

入ってきた女子は魁人を指差すと急に大声をあげた。

「ああ、お前は昨日の…。」

「え?何、魁人くん、優子と知り合いだったの?」

「ああ、昨日、ちょっとな。」

入ってきた女子は昨日魁人が助けた女子…「木下 優子」だった。

「あ、あの。昨日はありがとう。」

「大したことないさ。あの後、大丈夫だったか?」

「ええ。心配してくれてありがとう。」

「昨日…？ 昨日、私と別れた後ですか？」

「ああ、そうだ。木下さんがチンドラにからまれてたんだな。助けた。」

「だから私を先に帰したんですね。」

「ああ、危ない目にあわせたくなかつたからな。」

優子は昨日のことでお礼を言い、魁人は昨日あつたことを説明した。

「でも、何か意外だな。緑野くんが人助けというか…。そういうことに首をつっこむのは。」

「困つてる人は放つておけない性分でな。女子なら尚更だろ。」

久保が少し意外だと言つと、魁人は困つている人は放つておけない性分だと言つ。

「でも、なんかかっこいいよね、そつこいつの。優子も惚れちやつたんじやない？」

愛子がふざけて言つ。しかし優子は

「な、何言つてんのよ？！／＼／＼そんな訳ないでしょ？！／＼／＼

と、明らかに焦つてしまつている。

「…冗談だつたんだけどなあ…。へえ、まさか優子がねえ…。」

愛子は簡単に見抜いたが、魁人は

「本当だよ。俺が女子にモテる訳ないだろ?」

と的外れなことを言つてゐる。

「しかも木下さんみたいなかわいい人が俺に惚れる訳ないだろうが。」

「なつ?—／／／／／」

優子は顔を文字どおり真っ赤にする。

「…鈍感で、しかも天然かい?」

「ホント、罪だよねえ…。」

魁人の発言に久保と愛子は苦笑いしてゐる。

「…まさか、優子さんが…。」

その中で、美穂は1人で何か呟いていた…。

第4話　ト校中つて何が起ひる確率高によね。（後書き）

紫苑さん、「メントありがといひやれこましたー。

やつと優子出せました…。

…優子つてこんなキャラだつナ？ w

正直、今回の話は自分であまり納得がいってません。

優子の話の件の流れが無理矢理すぎるかな？ちょっとおかしいこと思っています。

まあ、自分の文才がないのを恨むしかないんですけど…。

そういうことなんでいつかちょっと手直しするかもしだせません。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂きありがとうございました！

第5話 IJの時期のAクラスって凄い暇だったと思ひ。

「あれ?今日はちゃんと授業受けるんですね?」

魁人が授業の用意をしているのを見て、美穂は聞く。

「ああ、たまには、な。それに……。」

「?」

「……多分授業は午前中だけだろうからな。」

「え?それ、どうこうことですか?」

「午後になれば分かるさ。」

魁人はおそらく授業は午前中だけだと言い、美穂は首をかしげる。

「IJで午前中の授業は終わりです。」

「ふう……やっと終わったか。」

「そうですね。それで、わたくしのことをどうぞですか？」

「ん？ いや、多分そろそろFクラスがBクラスに宣戦布告しているだらうからな。」

「そんなこと、なんで分かるんですか？」

魁人が午後の授業がなくなる理由を話すと、美穂は不思議そうにする。

「なあに、ちょっと考えれば分かるだ。そして、飯でも食いつか…」

そう言いつと、魁人は弁当を広げ始める。

「縁野くん、それって手作り？」

「縁野くんが料理できるなんて、意外だな。」

そうすると、愛子と久保が弁当をもつて魁人の席まで来た。

「あ、こ一緒に緒してもいいかな？」

「別に、かまわない。美穂もいっただろ？」

「はい。是非。」

「なら、お言葉に甘えさせてもらひつかな。」

「あ、待つて、アタシもー。」

優子も弁当をもつてこひらまで来る。

「それで話を戻すけど、緑野くんって料理できるんだね。」

「ああ、一応な。」

「あまつせうごうイメージではないけどね。少しもひつてもいいかい？」

「別にいいぞ。好きなの取れ。」

「あ、アタシもいい？」

「ボクも！」

そういうって皆が魁人の弁当をとりはじめる。

「あの～、久保くんはともかく、女子はやめた方が……。」

「え、なんで？」

美穂の忠告に優子は聞き返す。

「……女子としてのプライドが欠片もなくなりますから……。」

「え？ それってどういって……。」

皆が魁人の弁当を食べると、動きが止まる。

「ん？ 不味かつたか？」

「いや、違うと思います。」

「…驚いたな。凄く美味しい。」

「…そつだね。さすがのボクでも、男子にこれほどの料理をつくられる…。優子なんて再起不能になつてるし…。」

「…美味しそう…こんなのが、勝てるわけ、ないじゃない…。」

久保と愛子は驚愕の表情をし、優子はなにやらぶつぶつ呟いている。

「…そつか?俺的にはこいつ弁当より、スイーツ系の方が自信があるんだがな…。」

「え?スイーツ?」

「1回食べましたけど、意識が飛ぶほどおいしかったです…。」

愛子は「スイーツ」という単語に興味を示す。

「デザートで一応、ショーケースなら作つてあるが食つか?」

「…普通学校のデザートでショーケースを持つてくるかい?」

久保は普通ありえないデザートに苦笑いする。

「シュークリーム?!ボク、大好物なんだ!…ちょうどいい!」

「ん？ ほら。」

魁人は何か思いついたようで笑うと、シュークリームを愛子に差し出す。

ちなみに優子は美味しい弁当をまた食べたため、今度はどうかヘトリップしている。

「ありがとう……。」

愛子はシュークリームを取のいと手をのばす。

だが、届かない。

なぜなら。

「……たゞドジで此の手を離れたり二へゆ。」

「ん? なんのことだ?」

ちよつとした意地悪である。

「ほれ。」

卷之三

愛子が手をのばすが、その度に魁人がよけるため、愛子はショークリームを手にいれられない。

「む～～。早くやめやうだー。」

「なら、早くとればいいじゃないか。」

底意地の悪い顔をして魁人は言う。

「魁くん、そろそろ意地悪はやめてあげたらどうですか？」

「ん、もうだな。」「う、せぬよ。」

美穂に注意され、魁人は愛子にショーケリームを渡す。

「……………はむ！」

處子はやうと手に入れたシニーケリームにかぶりつく

સુરત - ૧

そこで、おおむねアーティストとしての活動は、た

か
?
「

「…とても美味しいと思つが。」

「慣れちまつたからな……。自分じやわかんねえ。」

「…」Jの頃、屋上では別の意味で再起不能者が出でていたが…。

…関係ないつす。

「今日の午後は自習になります。」

高橋先生が教室に入りそう告げると、すぐに教室を出て行つた。

「本当に自習になりましたね…。」

「な…言つたら…。」

魁人の予想は的中し、美穂は感心する。

ちなみにトリップ者2名はつい先程現世に帰つてござりました。

「一応課題ぐらにはやつとくか…。げ、英語かよ…。」

今日の課題は英語プリント2枚である。

「ん？ 緑野くんって英語苦手だったの？」

すると優子が魁人に声をかける。

ちなみに、意外と魁人と優子の席は近かつたらしく、魁人の席の左前だつた。

「…教えてあげよつか？」

「そうだな、そうしてもうえると助かる。」

優子の申し出を魁人は迷うことなく受けける。

「で？ 何が分かんないの？」

「…文の作りがまったく分からぬ。単語や連語、表現技法なら分かるんだがな…。」

「…それで次席をとれるつてどういうことよ。」

魁人の英語の点数は150点前後である。

「この程度できければ普通はOKだろ。Aクラスだからそう感じるだけで。」

「まあ、そうなのかもしないわね…。いい？ まず「このほど」の疑問詞から初めて…「この文法でこれを表して…。」

「ああ、なるほど…。で、「この」の使い方か。」

「そ、う。なんだ、やればできるんだじゃない。」

魁人も基礎はしっかりしているらしく、少し教わるとすぐに出来るようになった。

「いや、木下さんの教え方がいいからだよ。ありがとう。」

魁人は笑顔でやう答えると、次々と問題を解いていった。

プリントの問題はほぼ同じ部分の復習だったの、一度理解するとすらすら進められるようになっていた。

「い、いや…。じゃ、じゃあアタシは席に戻るわね…。」

「ああ、ありがとな。」

そう言つと優子は席に戻つていった。

(2人でああしているだけでこんなにドキドキするなんてね…。
どうやら、本格的に惚れちゃつたみたい…って、アタシ、何考えて
んの?—)

自分で考えて恥ずかしくなつたらしく、優子は顔を赤くし、自
分のプリントを進めていった。

「……。」

美穂はそれを複雑な面持ちで見ていた…。

第5話 IJの時期のアクラスって凄い頃だったと思ひ。 (後書き)

なんか、恋愛が上手くかけないつ！

誰かアドバイスを…（泣）

次回も読んで下さると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございましたー。

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思つ。（前書き）

…なんかどんどんタイトルが長くなってるw

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思つ。

「ふああ～～～。やっと学校終わりか～～～。」

魁人は大欠伸をしながら言つ。

「あら? 珍しいわね。ずっと起きてたんだ。今日一回も寝てないんじやない?」

「そうだな。午後寝ようと思つてたから、午前は寝てないし……。」

「午後は何やつてたの?」

「木下さんに教わつたことの復習。忘れないうちに復習しこいつと思つて。」

「緑野くんにあそこまで出来ない教科があるのは意外だったわね……。あれで次席とれるんだつたら英語でもうちょっと点とれるようになれば主席でも狙えるんじやない?」

「それは勘弁だな。試合戦争では前に出たいしな。」

「まあ、男子は皆そう言つわよね。」

魁人は優子と談笑している。

「…………。」

美穂はその様子を黙つて見ている。

「……いいの？」のままじゅう優子に先行かれちゅうよ？」

「良くはないですか……。でも……。」

「じゃあ、ほりー！」

「えつ～～～きやつ～～！」

愛子は美穂を魁人達のほうへ押し飛ばす。

「ん？ 美穂か。……ああ、そういうえば今日も一緒に帰るんだったか。」

「え？ あ、はい！ そうですね……。」

魁人は昨日の約束を思い出したりしく、帰る支度をする。

「よつと……。じゃあ木下さん、また明日な。」

「ええ、また明日。」

「じゃ、行くか。」

「はい。木下さん、さようなら。」

そういうて、魁人達は教室から出た。

「ちよつと悪いけど校門のところで待っててくれるか？」

「別に構いませんが……。忘れ物ですか？」

「いや、ちょっとFクラスに用があつてな……。悪いけどちょっと待つてくれ。」

「分かりました。校門でまつてます。」

「悪いな。」

そういうて、魁人と美穂は一旦別れた。

「ここか、Fクラス。……ん？」

魁人が扉を開ける前に扉が開いた。

「ん、魁人か。ちょうど良かつた、ちょっと聞いてほしいことがあるんだが……。」

そこには、雄一、明久、康太、姫路がいた。

「どうした？」

「今、俺達がBクラスと戦争してるのは知ってるだろ。」

「ああ、それで？」

「実は、今Cクラスが不穏な動きを見せていってな。不可侵条約を結びたいんだが…。」

「…………。」

雄一の話を聞くと、魁人は考えこんだ。

「……お前ら、Bクラスと何か条約をむすんだか？」

「よくわかつたな。今適用されているのは明日の再開戦までの一切の試召戦争に関わることの禁止だけだがな。」

「……それだ。」

魁人が口を開くと、雄一は答え、魁人は笑う。

「おそらく、Cクラスで条約を結びたい、と言つたら、Bクラスがでてきて条約違反だと言つ氣だろ。」

「なるほどな…。だが、BクラスとCクラスには何かつながりがあるのか？」

「あまり知られていないがな…。Bとの代表は付き合つてている。」

「

「…そつか。だからこっちに有利な条約を結んだわけか…。」

魁人は自分の推理を話すと、雄一は理解する。

「え？どういつ」と？

だが明久^{バカ}には理解できない。

「なんかバカにされた氣がするよ？…」

「しあうがないだろ。バカなんだから。」

「…お前はバカ。さつきのは俺でも分かつた。」

雄一と康太に駄目押しを食らい、バカ（明久）は「ちよつと？…」
…こっちに入つてくるなよ。

「それで、どうするんですか？」

「そうだな…。条約を結びにきた、と見せかけてあいつらをはめてやるか。」

「なら、俺は邪魔だな。待たせてるやつがいるから、俺は帰るぜ。」

「

「彼女か？」

「んなわけなえだろ。じゃあな、上手くやれよ。」

「ああ。ありがとな。」

姫路の問いに雄一は答え、なら俺は帰ると、魁人はその場を離れた。

「けつこう待たせちましたか？」

「悪い。待たせたな。」

「いえ……じゃあ、帰りましょう。」

「ああ。」

そして2人は帰つていった。

(今日は縁野くんとけつじつ話せたな…。)

一足先に帰っていた優子はもひ家についていた。

今日のことをふりかえってみよう。

そして、一つの不安なこと。

(縁野くんも、秀吉のことを知つたら、あいつに流れていくやうのかな…。皆みたいに…。)

男であるはずの弟、「木下 秀吉」にしか皆、田がいかなこじと。

(嫌…そんのは…。縁野くんなら、そんなことは…。でも…。)

優子はその不安を振り払えずにいた。

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思つ。（後書き）

なんか、美穂があまり目立たなくなってきたる…。

うーん、ヒロイン2人つて難しいなー…。

次回も読んで頂けると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第7話 恩を仇で返すつばさむじとへ

登校中…

「ん？…あれは…。」

誰か見つけたようだ。

「なんだ、雄一か…。」

「…自分からこっち来て、それかよ…。」

「しかし、今日は早くないか？」

「そのまま学校に行くとスクールバスの30分前になります。」

「ああ、やることがあるんでな。」

「ふうん…。で、昨日はどうなった？」

「鎌かけたら簡単に言つてくれたよ。卑怯者もひつかつて出で
きて、一網打尽だ。」

昨日あれから見事に策を打ち破り、逆に相手に痛手を『くわえてやつ
たらしい。

「あいつはとり逃したが、他のBのやつ5人ちょっと、補習に送
つてやつた。」

停戦中だったが、先生らの審議の結果、そのB連中は今回の戦争には出れないらしい。

「成る程な…。で、じはビリするんだ?」

「それを今からなんとかする。ちよつと用意があるから、先に行くな。」

「ああ、じゃあな。頑張れよ。」

雄一を見送り、魁人は一人で登校した。

「はよ~。」

教室に入り、一応挨拶する。

「おはようございます。」

「おはよー、緑野くん。」

「おはよう。」

美穂、愛子、久保が返す。

「あ、おはよー、縁野くん。」

優子も遅れて返す。

「今日は俺より早くかつたんだな。」

「昨日がいつもより遅かっただけ。いつもこのぐらいよ。」

昨日自分より遅く来ていたため、いつも自分より遅く来てみると
思った魁人が聞くが、優子は昨日が特別遅かっただけだと言つ。

「昨日でFクラスとBクラスの決着がつかなかつたらしくから、
今日も自習だらうな……。」

「2年に上がつてからまともに授業してないよね……。」

魁人がいうと愛子が苦笑いで返す。

「まあ、楽だからいい」「木下 優子はこいつ? ! なんだ?」

魁人が楽だからいいと言おうとするが、急にドアが開き、誰かが
叫びながら入つてくる。

「木下 優子……私達を豚呼ばわりして……許せないわ! ! !」

「はあ? 話が見えないんだが?」

「君はCクラス代表の小山さんかい? 木下さんは朝からずっと僕
らと一緒に居たが?」

Cクラスの代表「小山 友香」は優子に怒りを込めた視線を送り、「そんなこと言つても騙されない!! 私達Cクラスは、Aクラスに宣戦布告するわー!!」

と、Aクラスに試召戦争をしかける。

「ああ~、ついにきたね~。本来こっちにはなんのメリットもないけど…。」

「……下位クラスからの宣戦布告は拒否できない。」

いつの間にか翔子も来ており、試召戦争のルールによつて回避できないと話す。

「……ちひ、雄一め。」

「え、どういひこと?..」

「なあに、誰の差し金が分かつたつてだけの話だ。」

魁人は面倒くさそうに話す。

「でも、今はFとBが戦つていますから、私達は開戦できませんよね?..」

「FとBの決着がついたらもう一度来るわ..。首を洗つて待つてなさいーー..。」

美穂の疑問に友香はやつ答えると、ドアを思い切り閉め、帰つていつた。

「……しかし、優子にすい」に敵意むを出しにしてたね……。」

「……。」

愛子はやつぱり、優子は身に覚えがないため、困惑しているよ
う。

「……気にするな。木下さんが何がやつたわけじゃないんだから…」

「へ、うん。」

「なら、気にする」とはない。いつもは何もしていないんだから
な。変な心配はするな……。」

「……ありがとうございます。」

魁人は優子を励まし、頭にぽんぽん、右手をのせると、優子は恥
ずかしそうにお礼を言つた。

「……天然、鈍感だからこそできるんだよねえ……。」

「……それにも程があると思つたけどねえ……。」

愛子と久保はこつもびつ苦笑にする。

「……。」

そして、やはり美穂は複雑な顔をしている。

「さて、宣戦布告されたんだ、こっちも用意しなきやな。」

「え？ でも…。」

「……あつちがいつ終わるかわからない。」

魁人が言うと、愛子と翔子が疑問をかえす。

「遅くとも午前中には終わる。絶対にな。」

「…ちなみに、緑野くんはどうちが勝つと思つてるんだい？」

魁人は断言すると、久保が勝敗の予想を聞く。

「F。そもそも、肩が代表をやつているクラスに雄一達のクラスが負けるはずがない。」

「随分信頼してるのね…。」

魁人はBクラス代表「根本 恭一」が心底気に入らないらしく、肩呼ばわりする。

「それで、霧島さん。頼みがあるんだが…。」

「……何？」

魁人は代表である翔子に頼みがあるといつ。

「今回の戦争の指揮、俺に任せてくれないか?」

真面目な顔で翔子に指揮権をくれ、といつ。

「……別に、構わない。代表の私は動けないから、それが妥当だと思ひ。」「

「ありがとうございます。じゃあ、早速、策の説明をするか。」

魁人は策の説明をしたいようだが、まだ生徒は揃っていない。

「……朝のHRのときだな。そこが一番いいだろ。」

「……そうですね。皆集まつてますし、宣戦布告のこともそのとき話しましょう。」

魁人の言葉に、美穂は賛同する。

「しつかりやつてね?緑野くんがしつかりしないと、クラスが負けるんだから。」

「分かつてゐる。やるべきときは、ちゃんとやるぞ。」

魁人は珍しくかなり真面目な表情でそう答える。

「頼んだよ。」

「頼りにしてるからね~。」

「……じゃあ、私達は席に戻る。」

その顔を見て安心したのか、皆は安堵した顔で席に戻っていく。

「…さて、期待ど、クラスの命運を背負つてるんだ。眞面目にやんなきやな。」

もう言いつと、魁人は自分の席のパソコンに向かう…。

第7話 恩を仇で返すつむぎと~（後書き）

「メントを頂きました！

紫苑さん、毎回ありがとうございます！

朝の出来事だけで1話終わらせてしました…。

次は魁人の策が披露されます！

面倒くさがりの真価やいかに？』

次回も読んでいただけた嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第8話 策士としての大能、開花？（前書き）

テストからの逃避、継続中w

第8話 策士としての才能、開花？

「さて、でかい声だつたから知つていいやつもいるかもしねないが、俺達AクラスはCクラスに宣戦布告された。」

ガヤガヤ…

「いつか来るとは思つていたが…。」

「ああ、こんなに早く来るとは…。」

「でも、今はFとBがやつてるから試合戦争は無理なんじやないの？」

あまり知つている人がいなかつたらしく、教室内はざわめく。

「…さて、一回静かにしてくれ。」

頃合をみて、魁人は場を鎮める。

ちなみに、普通は代表が前に立つものだが、代表が

「……私はそういうの苦手。縁野がやつて。」

ということで、魁人が前で話している。

まあ、一応翔子も前に居るが。

「…指揮権についてはさすがに代表が言つた方がいいだろ。」

「……分かつた。」

代表から直接指揮権については話してもういたほうがいい、と考えた魁人は、翔子にそう促す。

「……今回の試合戦争では、学年次席の緑野に指揮をとつてもうう。皆、緑野の指示を聞くよ。」

ザワザワ…

「なんであいつ…？」

「でも、次席らしきよ？」

「代表も確かにそいつ…とは苦手やつだけビ…。」

魁人の指示を聞くことに抵抗のある人が多いらしく、また教室はざわめく。

「ほら、ちゃんと緑野くんの言つこと聞いてー！」

今度は優子が鎮める。

「ありがとう、木下さん。」

「いや、いいわよ。それより、話の続きを。」

「ああ。今回はどうえず俺の指示に従つてもいいたい。今回それで失敗したり、気に入らない策だったりしたら、次からは他のや

つに指揮をしてもいい。それでいいか?」

「そうだな、今回はいこんじやないか?」

「お手並み拝見つてというだね。」

他のクラスメートも納得してくれたようである。

「ありがとうございます。それじゃあ、今回の策を説明する……」

「……以上だ。何か問題点、質問などあるやつはいるか?」

最後に問いつが、誰も手をあげない。

「じゃあ、この策でいいと思つ。皆協力をよろしく頼む。」

『お~!~!』

基本、ノリがいい人達みたいである。

「はあ、緊張した。」

「全然、そうは見えなかつたけど。あーいつの、会つてゐんじやない？」

「確かにね。立派だつたよ。」

魁人が席に戻ると、いつもの4人が近付いてきた。

「そうですね。堂々としてて、かつこよかつたです。」

「そうだね。」

「ありがとう。」

それぞれが魁人を褒め、本人も満更じやない様子である。

「でも、大丈夫なのかい？あの策だと、縁野くんが大変すぎると思つんだが。」

久保がさつきの策について聞く。

「『れぐらいやんないと皆ちゃんとついてきてくれないしな。それに、それほど大変じやないさ。1人じやないしな。』

「ま、そりやそうだね。縁野くんならなんとかなりそうだし。」

「だが、俺が成功させるには皆の協力が必要不可欠なのはさうきも言った通りだ。お前らが少しミスると俺達が危険になる。背中はたのんだぜ？」

「ああ、わかつてゐるわ。」

「任せて！」

久保と愛子はやる気が全面に出ている。

まあ、クラスメートは全員やる気がだが。

「美穂と木下さんも、よろしくな。」

「もちろん、やれるだけはやるわ。」

「頑張ります！」

優子と美穂も気合を入れている。

「まあ、開戦はおそらく昼の後だ。こんなに早く気合を入れて、開戦になくなっちゃわないとよつにな。ペース配分を考えよう。」

「…流石にそんな馬鹿なことはしないよ。」

魁人の忠告に愛子は苦笑いする。

「じゃあ、俺は寝て、体調を整えるか…。」

「試合戦争前だつていつてゐるのに、よく寝れるわね……。」

魁人は優子が言い終わる頃には、もう寝息を立てていた。

第8話 策士としての木能、開花？（後書き）

うへん、やっぱり文字数少ないかな？

今回魁人が話したといひは、A対Cが終わつたら書きます。

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第9話 開戦！！Aクラス対Cクラス！

「わあ、開戦5分前だ…。既、策は覚えているな？」

『もちろん…。』

「俺達の陣中は諸君に任せたが…。」

『任せとけ…。』

最高にノリのいい顔をした。

Aクラスのイメージはどうへや？…。

『緊張しますね…。』

「そうね…。でも、多分これからこのことも増えるはずだから、慣れないところ…。」

「ボクは少し楽しみかな～。」

「本格的に召喚獣を動かす機会は少なかつたからね。僕も楽しみだよ。」

美穂、優子、愛子、久保といつづりのメンバーが魁人のまわりに集まっていた。

「さて、俺達はそろそろ準備しておこう。」

「「そうね（そうですね）…。」」

「頼んだよ。勝敗は君らにかかるてるんだからね。」

「分かつてゐるさ。そつちもしつかりやつてくれよ？」

そう言つと、魁人、美穂、優子の3人は広い教室のどこかへ消えていった。

「3…2…1…。」

『開戦だ！』

遂に開戦の時間になつた。

しかし、Aクラスのメンバーは動かない。

「さあ、何人でくるか…。」

「全員だつたらすぐに終わるんだけどね。」

久保と愛子も動かず話をしている。

『Aクラスを潰せええ！…』

『俺達を罵倒したAクラスを許すなああ…』

そこへCクラスが突撃してきた。

「来たよ！」

「よし、クラスのほぼ全員がいる…。今だー男子、動くぞ！」

男子の指揮権を預かった久保が指示を出す。

すると、男子は2つに別れ、翔子を守るのは横1列になった女子だけとなつた。

『どうこうことだ？…』

『かまわん！そのまま女子を突き破れ！』

頭に血がのぼり、冷静な判断ができないCクラスは、かまわずそのまま突っ込む。

「男子！作戦どおり後ろからたたくぞ！策を忘れず、冷静に戦え！」

『おお…！』

すると、2つに分かれていた男子が、Cクラスの後ろで1つになつた。

「一人も逃がすなよ。」

久保は普段からは想像できない声で指示を出す。

『かこまれたぞ?』

『前は女子しかいないんだ!』のまま突き進むぞ。』

『嘘、ijiが耐えどjiろだよー焦らず、冷静に対処して!』

今度は女子の指揮権を預かった愛子が指示を出す。

『緑野くんが言つたことを忘れずないで! 1対1なら負けないよ
!』

魁人の策を忠実に守り、Cクラスを包囲していく。

『よし...、ijiまでは緑野くんの作戦どおりだね...。』

愛子は安堵の息をつく。

『男子、策が成功したからって、油断するな!』

しかし久保は気をゆるめることなく指示を出す。

『おつと、ijiで落ち着くちや、駄目だね...。』

愛子も気を引き締めなおす。

『女子もだよー。ボク達が崩れたらAクラスが危ないんだからね!』

「「勝つのは、絶対僕達Aクラスだ（よ）ーー。」

愛子と久保の声が重なる。

その声に応えるように、Aクラスは歓声をあげる。

「……あつひは上手くやつてくれたみたいだな……。」

「そうですね。こっちもそれに応えないと……。」

「あんまりゅうじゅうじゅうしてると、あつちが危なくなるから、早くいきましょ？」

「ああ、そうだな。」

魁人、美穂、優子の3人は高橋先生を連れ、Cクラスへ向かっていた。

男子が2つに分かれた時、それにまぎれて教室を出ていたのだ。

「ここか、Cクラス…。」

元々場所が近いので、すぐについた。

ガラツ！！

「高橋先生、数学のフィールドをお願いします！俺達3人がCクラス6人に数学勝負を挑みます！！」

「承認します！」

「え？！」

「「「試験召喚獣、試獣召喚！－！」」

CクラスはAクラスが来ることを予想していなかつたのか、代表の友香と、生徒5人しかいなかつた。

そして3人の点数が表示される。

数学

Aクラス

緑野魁人&木下優子&佐藤美穂

867点&377点&343点

「へえ、2人もけつこうできるんだな。」

「緑野くんに言われてもね…。」

「私達の点数をたしても、魁くんに届きませんし…。」

魁人は得意の数学のため、異常な点数をとっている。

「わあ、早く召喚してくれよ。それとも、降参か?」

「くつ、調子に乗るんじゃないわよー。試験召喚! サクエンジヤウ!」

数学

Cクラス

小山友香 & その他5人

188点 & 150ぐら $\times 5$

『俺達の扱いひどくない?!!』

いや、だつてモブだし。

『〇×』

「じゃあ、行くぜ!』

魁人は高得点のため、瞬間移動にも近い速さで接近していく。

魁人の召喚獣は剣道の胴着袴に竹刀をもつている。

「まず2人！」

そう言ひと、一瞬で2人の両脇腹を1回ずつ打ち、消滅させる。

『な？！』

「美穂、木下さん、そつちの2人は任せた！」

そう言いながら、魁人は相手の喉元に突きをくらわせ、相手がよろめいたところに剣道でいう「面」をきれいに決め、友香の召喚獣に接近していく。

「……このままだとアタシ達が倒す前に終わりそうね……。」

「そうですね……。」

そんなことを言つてゐる間に魁人は友香の召喚獣を一瞬で切り捨て、勝負をつける。

「ん？なんだ、お前ら戦わなかつたのか？」

「緑野くんが終わらせるのが早すぎるので……。」

優子は呆れて言つ。

「勝者、Aクラス！」

こうして、Aクラスの初戦争は30分もたたずに終戦を迎えた。

第9話 開戦！！Aクラス対Cクラス！（後書き）

設定には書かなかつたんですが、魁人は召喚獣での戦いに興味をもつていたので、明久が手伝いをしているときに一緒に召喚したりしてるので、扱いには慣れています。

なので、操作技術は明久に引けをとります。

気が向いたらその内主人公紹介に更新しておきます。（すぐやれよ）

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。（前書き）

今回は第8話のときの策の説明をしようと思ったんですが、一応戦後対談を形だけでも終わらせるかと思ったのでこっちを先にしました。

では、どうぞ。

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。

「あ、おかえり！」

（クラスから帰ってきた魁人に愛子は声をかける。

「ただいま。）」

「ちはどうだつた？」

「策が出来すぎなくら」上手くいってね。こっちの戦死者は0だ
つた。」

今度は久保が返す。

「あつちも5人しかいなかつたからな。良い練習になつたか？」

「まあまあだね。ちょっとはなつたかな。」

愛子も久保もそれなりにはできたらしい。

「そろそろ戦後対談を始めてください。」

担任の高橋先生が声をかける。

「霧島さん、呼んでるぜ。」

「……緑野、行つて来て。」

「はあ？」

「そうだね、今回の試合戦争でのトップはある意味緑野くんだ。
それが筋だろ?」

「……マジかよ……。面倒くせえ……。」

魁人が行く流れになってしまい、魁人は渋々行くことになった。

「悪いが、木下さんついてきてくれるか?」

「別にいいけど……。何で?」

「代表が行かないなら、女子の代表は木下さんだろ。」

「そういうことね……。まあ、いいわよ。」

魁人は男女からそれぞれ1人ずつ代表を出して行く気らしく、翔子を除いた女子でリーダーシップをとれる優子を連れていくことにする。

「じゃあ、行つてらっしゃい。まあ、設備を落としてもらつだけだがな。」

「

「うん、行つてらっしゃい。」

魁人と優子は再びCクラスに向かう。

「……。」

「……佐藤さん?どうかしたのかい?」

久保は美穂の様子がおかしいのに気がつき、声をかける。

「「へへん…。」Jの問題はボク達でどうにかできる問題じゃないと思つんだよね…。」

愛子は理由に心当たりがあるらしく、少し考える。

「とりあえず、悪いんだけど久保くんは別のことに行つてもいいれる？男子に聞かれるのもちょっと嫌な話になるかもしれないし…。」

「分かった。じゃ、また後で。」

久保は自分の席に戻つていった。

「さて…。美穂ちゃん。多分、縁野くんのことでしょう？」

「…はい…。」

「話していらっしゃる？ボクで力になれば、手助けするよ。」

「ありがとうございます…。」

美穂は愛子に向こうと話を始める。

「…この頃、魁くんが急に木下さんと仲良くなっちゃつて…。怖いんです。いつか私の近くからいなくなつてしまふんじやないかつて…。もちろん、私と魁くんが付き合つているわけじゃないので、そんなわがままを言つことは許されないのかもしませんが…。それでも、私は魁くんと、出来るだけ、長く一緒にいたいんです…。」

美穂は途中から涙を浮かべながら話す。

「そっか…。きっと、寂しいんだね…。」

「寂しい…。そうなのかもせんね…。私は、魁くんがどんどん遠くへ行っちゃうのが、寂しいのかもせん…。」

美穂は本当に悲しそうな顔で話している。

「…でも、ボクはこのままじや、絶対ダメだと思つた。」

「…どういふことですか？」

「ずっと一緒にいたいっていふけど、優子がいるから潔く身を引く? それじゃ、ダメだよ。優子には絶対渡さない、自分のものにしてみせる…って気持ちでいなきや。もつと、積極的にならなこと。」

優子は自分の考えを美穂にぶつける。

「ボクが言えることばれられないかな…。後は、美穂ちゃんが自分で考えることだよ。」

「はい…。ありがと! わざわざ、上藤さん…。」

「優子でこによ。」

「…優子さん、ありがとうございます…。私、頑張りますね…。」

美穂は、笑つてやうこい。

「その意気だよ！応援してるから！頑張ってね～！」

愛子はそういうて席へ戻つていく。

「…そうですね…。もっと、積極的に…、ならないと…。木下さんには、絶対、負けません…！」

静かに決意を固めた美穂だった。

「戻つてきたぞ～。」

それから少しして、魁人が戻つてきた。

「あ、魁人くん、おかえりなさい～。」

美穂は魁人を見つけると、そう声をかけてくる。

「まつたく、ダメじゃない緑野くん。こんなかわいい娘を泣かせちゃあ。」

愛子が茶化すように言つ。

「まあへビリリ」とだ?」

「ちよつと、愛子さん? ! / / /」

魁人は意味が分からぬ、といつよつに首をかしげ、美穂は顔を赤くする。

「あはは、冗談だつて。じゃあ、また明日ね。」

もう下校の時間らしく、愛子は帰つていぐ。

「魁人くん、今日も一緒に帰りましょー!」

「ん? …別にいいが…、何をそんなに焦つてるんだ?」

「いいですからー早くいきましょー!」

「おい、ちよつと待つて…。じゃあな、木下さん。」

「え、ええ…。」

美穂は魁人を引つ張つて教室から出て行く。

「…やれやれ、これから大変になりそうだね…。」

その様子を久保は遠くの席から見ていた…。

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。（後書き）

…なんかおかしいよおお？！

はあ、この頃上手く話が書けないなあ…。

だれか、アドバイスを惠んで下さい…（泣

そして愛子の美穂に対する呼び方が分からぬ！

なんかどんどんおかしくなつていつてる気がする。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第10・5話 策つて結局何だったの？（前書き）

今回は第8話の策の説明のところの話です。

ただの振り返り的な感じですませる予定なので、流しても大丈夫だと思います。

では、どうぞ！

第10・5話 策つて結局何だったの？

「わあ、策の説明を始めるぞ。」

Aクラスの全員が魁人のいうことに耳をかたむける。

「まず、向こうの動きだ。おそらくあの様子だと、何も考へず全員で突っ込んでくるだけだ。何も怖くない。」

「確かに、すごい怒りようだったわね……。」

「優子からしたらとんでもばっちりだったよね～。」

優子は少し引き気味に話し、愛子は苦笑いする。

「戦う場所だが、この広い教室を利用しようと思つ。」

「この教室を、かい？」

ここで戦う、という魁人の言葉に、久保は聞き返す。

「そうだ。俺の策も、その方がやりやすいしな。」

魁人はその方が都合がいいと言つ。

「まず、俺達は部隊を3つに分けることにする。まず一つ目はその相手の突撃を抑える部隊。これは女子全員に任せせる。このクラスは女子の方が多いからな。」

「わかつたわ。」

女子から代表して優子が返事をする。

代表はそんなに戦うわけにはいかないのでこの部隊に入らないことをわかっているからだ。

「次に2つ目の部隊。抑えた相手を後ろから攻め立てる部隊。これは男子に任せせる。」

「なるほど。だが、後ろをとるのは難しくないかい? この教室で戦うんだろう?」

久保は魁人の策に疑問をもち、質問する。

「いや、そこまで難しくはない。さつきも言つたが、相手はただ突っ込んでくるだけだ。相手が突っ込んできたところを左右二手に分かれて通してやれば、簡単に後ろをとれる。信じられないかもしけないが、本番になつたら分かるさ。」

「わかつた。」

男子からはさつままでと同じ久保が返事をする。

「そして最後の部隊。男子と女子がCクラスを抑えている間に、Cクラス本陣へ奇襲をかける部隊だ。これには俺が参加する。」

「一人で奇襲をかけるんですか? 危険だと思いますが…。」

今度は美穂が質問を投げかける。

「もちろん、そんな無謀な真似はしない。この部隊には霧島さんを除いたメンバーでの数学トップ3が入る。高橋先生、誰か調べてくれますか？」

「分かりました。少し待つて下さい。」

魁人が奇襲をかけるのは3人だと言い、高橋先生にその選抜に選ばれる人を調べてくれ、と言つ。

「…出ました。緑野くん、木下さん、佐藤さんですね。」

「ありがとうございます。さつきの3人…、俺、木下さん、美穂の3人で奇襲をかける。そのために、男子は絶対に後ろにCクラスのやつを通さないでほしい。」

「分かった。任せてくれ。」

また久保が返事をする。

「今回の戦いは召喚獣の操作に慣れるため、つまり操作の練習だと思ってくれ！無理に相手を撃破する必要はない。1対1なら負けることはないから、必ず1対1に持ち込んでくれ！」

『了解！』

「男子の指揮は久保くん、女子の指揮は工藤さんに任せる。2人はその場その場に応じて、指示を出してくれ。」

「わかった（よ）。」「

「おそらく、開戦は脅威になると思う。それまでに自分がやるべきことをしつかり理解してくれ。以上だ。」

そう言つて魁人は席に戻つた。

ほとんど何も話さなかつた翔子も、魁人の話が終わると席に戻つていつた。

第10・5話 策つて結局何だつたの? (後書き)

こんな感じで説明していました。

特に説明する必要もないかな?と思つたので、一いつこいつ番外編みた
いな感じで説明しました。

次回からは遂にA対Fの話に入つていいく…はず。

次回も読んで下さると嬉しいです!

お読み頂き、ありがとうございました!

第1-1話 優子の心配事、実現間近？

「あ、魁人くん！」

たゞだゞいゝまゝ登校中。

「ん？ 美穂か。」

「おはよっ！」わざとます。」

「ん、おはよっ。なんか、今日は機嫌がいいな？」

「はい、今日は朝から魁人くんに会えましたから。」

「ん？ どうこう」とだ？

「な、なんでもないです！」

美穂は言つて恥ずかしくなったのか「まかした。

「おはよう」ざいます。」

魁人と美穂は2人で教室に入る。

「お、朝から2人で登校？熱いねえ」W

愛子がいきなり茶化す。

「そ、そんなんじゃないですよ／＼／＼」

「…あーさつも返さずいきなり茶化されるとはな…。」

美穂は顔を赤くし、魁人はため息をつく。

「あ、緑野くん、おはようー。」

「ん、木下さんか。おはよう。」

優子はきちんとあこせつをする。

「ん、久保くんはどうした？」

「わざわざまでいたけどね。トイレじゃない？」

久保がいないことに気づき、魁人は問う。

「皆、Aクラスにお密さんだよ。」

するとその久保が戻ってきた。

：「Fクラスをつれて。

「やつぱり来たか、雄一。」

「ああ、やつとこまで来たぜ。」

「待ちくたびれたぜ…。歓迎するよ。」

魁人はFクラスとの勝負を楽しみにしていたらしく、笑っている。

「さて、今日は宣戦布告しに来たわけだが…。ちょっと交渉をしたい。」

「まあ、立ち話もなんだから、こっち座れよ。」

「ん、すまないな。」

魁人は雄一達Fクラスを席に案内する。

ちなみにFクラスから来たのは雄一、明久、康太、姫路の4人である。

「で、交渉ってのは何だ？」

今回、交渉のテーブルについているのは魁人、補佐として近くに優子がいる。

「ああ。勝負を一騎打ちにしたい。」

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試合戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

雄一は基本のクラス同士の対決ではなく、代表同士の一騎打ちで勝敗をつけたい、という。

「却下だな。俺達にはわざわざリスクを犯す必要がない。」

「賢明だな。」

魁人はすぐに却下し、雄一は予想していたのか構わず続ける。

「とにかく、Gクラスの連中との試合戦争はどうだった？』

「ああ、お前らのせいで起きたやつのことか？」

「ちよつと、それどうこうこと？」

雄一はじクラスとの試合戦争について聞くと、魁人はその元凶である雄一を睨み言つが、優子は話についていけないようで、魁人に聞く。

「簡単なことだ。あのじクラスとの戦いは雄一に仕組まれたことだつたつてことだ。」

「やつぱり気づいてたか…。」

「当たり前だ。」

「…そういうことね…。」

魁人はあの戦いは雄一が仕組んだこと、と言つと優子は納得してうなずく。

「さて、ここで一つ雄一にしてもらわなければならぬことがある。」

「なんだ?」

魁人は雄一がするべきことがある、と言つ。

「決まってるだろ?…木下さんに謝れ。」

「は?」

「は？、じゃねえだろ。木下さんはそのせいでとんだ濡れ衣をかけられたんだ。そのぐらいして、当然だろ？」

魁人は優子に謝れ、といつもとは違うとても真剣な眼差しで雄一に言う。

「…そうだな。すまなかつたな、木下姉。変な濡れ衣をさせて…」

「

雄一は、魁人がこの眼をしたときは決して意見を覆さないことを知っているので、眞面目に優子に謝る。

「ま、本人は肅清したし…。別にいいわよ。」

「…朝あいつがボロボロだつたのは、そういうわけか…。」

優子はそつなつた原因を肅清した、といつて、雄一は少し顔を青ざめさせる。

「さて、本題に戻るが。簡潔に言つと、Cクラスはまるで相手にならなかつた。お前も知つてゐるんだろ？。」

「ああ…。まさか、30分で終わらせるとは思わなかつた。」

魁人はCクラスなんて相手にならなかつた、といつとそのことを雄一も知つていたようで苦笑いを浮かべる。

「Bクラスを使って脅すつもりかもしけんが…。俺にはその手は通用しない。こと同じようこ、瞬殺してやるぞ。」

魁人は雄一の考え方を読んでいるようで、それは通用しない、とい
う。

「そもそも、こんな策が俺に通用すると思ったのか？」

「いや、交渉相手は木下姉だと思っていた。お前は面倒くさが
つて出ないだろ？と思つてな。」

雄一は魁人に通用する策だとは思つていなかつたようで、魁人以
外に使うつもりだったと言ひ。

「あてが外れたな。だが、条件次第では飲んでやつてもいいんだ
ぞ？」

そこに魁人は少し助け舟を出す。

Fクラスとの勝負をそんな簡単につけたくないからだ。

「そうだな…。なら、5対5の代表戦ならどうだ？」

「そうだな…。別にかまわない。教科選択権は俺らが2、お前ら
が3つってどこか？」

「ま、妥当なところだろ。交渉成り…」

「……ちょっと待つて。」

「うわっ！」

話し合いを終わりにしようと思つたら、翔子が話に入ってきた。

「なんで、そんなに驚いてるんだ？明久。」

「だつて、急に…。」

明久は急に出てきた翔子に驚いたようだ。

「……一つ、条件をつける…。」

「ん、何だ？」

「Jで翔子は一度姫路のほうを見る。

「……負けたほうは、なんでも一つ言ひJとを聞く。」

「…なぜお前らはそんなに拳動不審になる？」

康太はカメラの手入れを始め、明久はなぜかオドオドしている。

「だ、だつて、もし負けたら姫路さんが…」

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄一！何を勝手に！まだ姫路さんが了承していないじゃないか！」

明久はさつきの翔子の行動から何か考えたらしく、姫路の了承がない、と言つ。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない。」

雄一は勝つ自信があるらしく、自信たっぷりに言つ。

「時間はどうする?」

「そうだな。10時からでいいか?」

「わかった。じゃ、また後でな。」

「ああ。」

魁人と雄一で時間を決めると、Fクラスは戻つていった。

「さて、交渉も終わりだ。席に戻るぞ……。つて、木下さん? どうした?」

後半ほとんど話に入つてこなかつた優子は何か考えていたらしく、魁人が声をかけても返事をしない。

「どうした木下さん? 体調でも悪いのか?」

そう言つて魁人は優子に顔を近づける。

「はつ? ! な、何でもないわよ? ! / / /」

優子は気がつくと、魁人の顔が近くにあつたため、顔を赤くする。

「そうか。じゃあ、俺は席に戻るな。」

そう言つて魁人は席に戻つていった。

(「Fクラスと、つてことはもちろん秀吉も来る…。緑野くんは…緑野くんなら、絶対に大丈夫…！でも、もし…。」)

優子はまだあの事が不安らしく、浮かない顔をしていた…。

第1-1話 優子の心配事、実現間近？（後書き）

うーん、美穂と優子の魁人との絡みに差がありすぎるかな？

なんか優子との話ばかり書いてる気がする…。

次はやつとA対Fです。一体どうなるか、魁人は優子の不安を晴らせるのか、お楽しみに！

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第1-2話 A対F！最下層からの挑戦～前半～（前書き）

やつとAクラス対Fクラスに入れました…。

では、どうぞ。

第1-2話 A対F！最下層からの挑戦！～前半～

「では、両名共準備は良いですか？」

今回は一騎打ちの形で行うため、立会いは全教科のフィールドを展開できるAクラスの担任、高橋先生だ。

「ああ。」

「……問題ない。」

もちろん今回の会場はAクラス。

両代表が、準備完了を伝える。

「それでは、1人目の方、どうぞ。」

「……（スック）

Fクラスでは康太が立ち上がる。

「初めから康太か…。」

魁人は康太の成績を知っているため、少し顔を歪める。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからは、愛子が立ち上がる。

「一年の終わりの転入してきた、工藤 愛子です。よろしくね。」

愛子はFクラスに自己紹介する。

「教科は何にしますか？」

「……保健体育。」

康太は自己の唯一にして最強の剣、「保健体育」を選択する。

「土屋くんだけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子も絶対的な自信をもつているらしく、臆せず言つ。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…キミと違つて、「実技」で、ね！」

問題発言。

「……工藤さん。女子がそういうことを言つのはあまり……。」

魁人は苦笑いする。

「そつちのキミ、吉井くんだっけ？ 勉強苦手らしいし、保健体育でよければボクが教えてあげようか？ もちろん、「実技」で。」

愛子は明久を指名して、挑発（？）する。

「フツ。望むと……」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「…………。」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが。」

「……明久。生きてれば、その内良いこと、あるって……。」

明久は今にも死にそぐくらい、悲しい顔をしていた。

「それから召喚を開始して下さい。」

「……工藤さん。油断するなよ。」

「大丈夫だつて。試験召喚^{サモン}つと。」

「……試験召喚。」

魁人は愛子に警告するが、愛子はそのまま召喚する。

「なんだ、あの巨大な斧は？！」

愛子の召喚獣は、セーラー服に巨大な斧といつぱスマッシュな召喚獣を召喚していた。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。」

そう言つと、愛子は（おそらく）腕輪の力で斧に雷光を纏わせ、異常な速さで康太の召喚獣に接近する。

「こりゃないけるな。」

「ああ、まずは1勝だ。」

その様子を見て、Aクラスの面々は勝利を確信する。

ちなみに点数はシステムの不調か、まだ出ていなかつた。

その中で魁人は、

「…負けたな。」

と、1人呟いていた。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーーくん。」

そう言つと、愛子は康太を一刀両断にしよつと、斧を振り下ろす。

「ムツツリーーッ！」

明久もその様子に不安を覚えたか、声をあげる。

だが、次の瞬間、

「……加速。」

康太がそう呟くと、康太の召喚獣は姿を消し、

「え？」

「……加速、終了。」

もう一度康太が呟くと、愛子の召喚獣は血を噴出し、消滅した。

そして、遅れて点数が表示される。

保健体育

Aクラス Fクラス

工藤愛子 VS 土屋康太

446点 572点

康太の勝利が確定する。

向こうの明久も驚いているようで、雄一が明久に何か言っている。

「そ、そんな……この、ボクが……！」

愛子はかなり悔しがり、床に膝をつく。

「……だから言つたる。油断すんなって。ま、ある意味自業自得だよな。」

「ちよ、ちよっと?…それは言こすきじやない?…」

そんな愛子に、魁人は厳しい言葉をかけ、優子はそれを咎める。

「……いや、悪いのは、ボクだから……。仕方ないよ……。」

愛子はショックを引きずり、クラスメートの中へ消えていった。

「……こりひなんでも、言こ過ぎよ。」

「いや、あれくらいでちよづじ良い……。愛子はAクラスの大事な戦力なんだ。いざつて時、油断と自信の違いも分からぬようじや困るからな。それに……。」

魁人は一度言葉を切る。

「……藤さんはあれくらいじゃへこたれない。今までの付き合いでの、そのぐらこのことは分かるわ。」

魁人もちゃんと愛子のこととは考へているようすで、厳しい言葉をかけた理由を微笑みながら話す。

「……でも、流石に厳しいんじゃない?一応、謝つておきなさいよ?」

「……俺から言つ気はない。意味が無くなるからな。」

優子は一応謝れと言つたが、魁人はそれでは意味がない、と言つた。

「では、次の方、どうぞ。」

2回戦が始まる。

「さて、俺が行くか。」

Aクラスからは魁人が出るようだ。

「よし、頼んだぞ、明久。」

「え、僕?!」

Fクラスからは明久が出るようだ。

「へえ、明久とか…。おもしろいな。」

「言つて來い、明久。俺は信じてる。」

魁人は笑うと、雄一は自信たっぷりに言つ。

「へえ…。僕に本気を出す!『御託はいい。とつととやらうぜ。』まだ言い終わつてないのに?!!」

魁人は明久の言葉を遮り、始めようと言つ。

「教科選択権は貰うぜ。先生、俺とこいつで別の教科で対戦つて出来ますか?」

「設定を変える必要があるので時間はかかりますが…。出来ないことは無いですね。」

「分かりました。では…。」

魁人は自分と明久で別々の教科を使いたいらしく、先生に聞き、どつちが何の教科を使うか言つ。

「…俺が数学、明久が総合科目でお願いします。」

「…分かりました。では、少し待つて下さい。」

先生にそう言つと、高橋先生は作業を始める。

「ちょ、ちょっと、大丈夫なの？！」

「ああ、俺は工藤さんと違つて油断なんてしていない。ちゃんと考えてこうしてるんだ。心配するな。」

優子は心配そうに聞くが、魁人は心配はいらない、と返す。

「いいの？魁人くん。」

「ああ、お前じや総合科目でもたかが知れてるしな。こうでもしないとつまらない。それと、俺はお前を呼び捨てで呼んでるんだ。お前も「くん」なんかつけるな。……気持ち悪い。」

「今、僕を馬鹿にした上、罵倒しなかつた？！」

「お、分かつたか。進歩したな。」

「僕だつてそれぐらいストレートに言わわれれば分かるよ？！」

魁人は明久を馬鹿にし、明久はそこまで馬鹿じゃないと言つ。

「ま、でも、後悔しないでね？魁人。」

「後悔なんてするはずないだろ？勝つのは俺なんだからな。」

魁人は絶対的な「自信」を持つてゐるようだ、明久にそう叫びつ。

「用意が出来ました。では、始めてください。」

「「試験召喚！」」

2人同時に召喚獣を出す。

今回はすぐに点数が出る。

数学＆総合教科

Aクラス Fクラス

緑野魁人 VS 吉井明久

847点 594点

「…こじまで差があるとはな。」

「僕をそんな蔑む目で見るのはやめて？！」

点数を見ると、A、Fクラス共に明久に蔑みの眼差しを向ける。

「ああ、行くぞ！」

まずは魁人が明久（こ）からは「召喚獣」という表記はとばします（）に向けて超スピードで接近する。

「そらつ！」

そして、明久の喉に鋭い突きを打つ。

「甘いよー！」

明久はそれを器用に流し、頭を殴るつとする。

「…かかったな。」

「えつ？！」

その瞬間、流したはずの魁人の竹刀が明久の頭上に降つてくる。

「くつ？！…あれ？」

咄嗟に明久は木刀で防ごうとするが、竹刀はすり抜け、明久にも当たらず、そのまま消えた。

「そこだ！」

「しまった？！…ぐあつ！」

その隙に魁人は明久の頭に面を打ちそのまま下がつていった。

「…武器の幻影を創り出す能力か？」

雄一が自分の予想で腕輪の能力を話す。

すると、

『完璧に面ありだ…。綺麗に引き面が入ったな。』

Fクラスの方からこんな声がする。

「…？　お、お前は須川？！　この学園だったのか？！」

「久しづびりだな、緑野。」

声の主、「須川　亮」は前に出てきて、魁人に言つ。

「召喚獣でも剣道の動きを活用できるとはな。しかも、突きは高校からだつてのに。」

「お前でも出来るだろ。お前の方が現役時代は強かつたんだからな。」

「え～っと、僕は無視？」

2人で話していると、フイードバックから復活した明久が声をかける。

「おつと。悪いな。じゃ、須川、後でな。」

「ああ。」

そう言つと須川はFクラスの中に消えていった。

「しかし、お前も馬鹿だな。さつき攻撃しちまえば良かつたものを。」

「……。ほ、僕はそんな卑怯な真似り「言い訳するな。」…。」

明久はまた言葉を遮られ、いじける。

「そんなことしてる暇あるのか？行くぞ！」

魁人はそう言つて明久にまた近付いていく。

「くつ！」

明久は迎え撃つ姿勢をとる。

「……終わりだ。」

「え？…いつたあ？！」

数学＆総合教科

Aクラス	Fクラス
緑野魁人	VS
807点	0点

「勝者、Aクラス。」

高橋先生の声が響く。

フィールドには、さつきまで前から明久に迫つていった魁人が明久の裏にいた。

「え？え？　どういうこと？」

「誰が幻影を創るのは武器だけと言つた？」

「…そういうことか。」

明久はまだ何があつたか理解していないようで、魁人が幻影を創るのは武器だけじゃない、と言つ。

「つまり、お前は自分の幻影を明久に突っ込ませ、その隙に後ろから攻撃したってことか。」

「ああ。俺の『幻影』^{ミラージュ}は俺、もしくは俺が触れているものの幻影を創りだせる。」

雄一は魁人がやつたことを理解し、魁人は自分の腕輪の能力を説明する。

「…終わつてみれば、やつぱり緑野くんの圧勝だったわね…。」

「相手がFクラスとはいえ、単教科で総合教科に挑んで圧勝つて凄いですね…。」

Aクラスでは、魁人の余裕の圧勝に、優子と美穂が苦笑いしている。

第1-2話 A対F！最下層からの挑戦～前半～（後書き）

流石に一気に全部は無理なので、前後半に分けました。

魁人の腕輪の能力は『幻影』^{ミリージン}でした。

1巻の内容は多分、あと多くて3話ぐらいで終わると思います。

次回は、A対F後半です！

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第1-3話 A対F！最下層からの挑戦～後編～（前書き）

一回消えて、やる気無くしました…。

この頃、1日1話更新の辛さを身にしみて実感しています。

ちゃんと継続できている人の偉大さを改めて実感しました。

第1-3話 A対F！最下層からの挑戦！～後編～

「では、3人目の方、どうぞ。」

「アタシが行くわ。」

Aクラスからは優子が名乗り出る。

「ワシがいいハ。」

Fクラスからは、優子の弟「木下 秀吉」が名乗りを上げる。

「…秀吉か。」

「？！」

魁人は秀吉の存在を知っていたらしく、優子はそのことに驚く。

（緑野くんは秀吉のことを知っていたの？…じゃあ、なんでアタシに優しく…。…もしかして、アタシが秀吉に似ているから？）

「木下さん…。木下さん？」

優子は困惑しているらしく、魁人の呼びかけにも気づかない。

「木下さん？大丈夫？」

「え？！ だ、大丈夫よ？！」

「…木下さん、この頃何かおかしいぞ？熱でもあるのか？」

「うー言ひと、魁人は自分の額を優子の額に当てる。」

「…熱は無いか。」

優子はやつと何があつたか理解し、顔を真っ赤にする。

「ちよ、ちよと何してんのよ？！」

「ん、熱があるのかと思つてな。ちよと確かめただけだ。ま、そんだけ元気なら大丈夫だる。」

魁人は特に異常は無いと判断し、今回の策についての頼み¹とをしようとする。

「今日は、ちよと無茶なことなんだが…。」

「何？」

「…秀吉に教科の選択をさせ、教科の宣言をさせた上で、戦わず勝つってくれ。」

文字通り無茶な頼みだ。

「…本当に無茶な頼みね…。」

「それは分かつてゐる。だが…、頼む。手段は問わない。」

「…分かつたわ。何とかしてみる。」

「…ありがとう。頼んだ。」

魁人も無茶なのはわかっているらしく、頭を下げるといふと、優子は何とかしてみる、と言ひ。

（緑野くんは、やっぱり秀吉に似ているからアタシのことを心配したり、優しくしてくれたり、するのかな…。）

優子は秀吉のなんらかの劣等感をもつていてるらしく、そう考へていた。

「さて、教科選択権は秀吉にあげるわ。」

「ありがたい。では古典で頼むのじゃ。」

優子は、まず魁人の指示通り教科を選択せざる。

「わかりました。」

すると、古典のフイールドが展開される。

「…ところで秀吉。」

「うむ？」

「……ちよつと話があるんだけど。じつは、来てくれない？」

満面の笑みで優子は言つ。

「し、じクラスの件は昨日で「いいから、来て？」……分かったの
じゃ。」

秀吉は震えながら、優子について行き、廊下に出る。

「何をする気かは分からんが……。あそこまで怖がってんだ。何か
あんだろ……。」

その時点では、魁人は策の成功を確信し、廊下での話など聞いて
いなかつた。

ガラガラガラ

「秀吉は急に具合が悪くなつたから、保健室に行くつて。他の人
を出してくれる?」

満面の笑み。

「い、いや……。ウチの不戦敗でいい……。」

雄一は優子の笑顔に圧され、不戦敗を認める。

「……フツ……。」

魁人は、誰も気づかないぐらいに笑みを浮かべた。

「あれでよかつたの？」

「ああ、上出来だ。助かつた、ありがとう。」

魁人は想像以上の出来に、今度は普通に笑みを浮かべる。

「無茶な頼みだったからな。今度、何か奢つてやるよ。」

「え、本当?」

魁人は無茶を聞いてもらつたため、礼がしたい、と言つ。

「ま、それについては後だ。これが終わつてからな。」

「そ、そうね……。」

(もしかして、これってデートのチャンス? !)

優子は浮かれ、先程まで頭を回っていた不安も、少しの間どこかへいった。

「これで2対1です。では、次の方。」

「あ、は、はいっ。私ですっ。」

「それなら僕が相手をしよう。」

Fから姫路、Aから久保が名乗りをあげた。

「久保くん、1つ頼みがある。」

「なんだい?」

「あっちに教科選択権を使わせてくれ。負けても構わない。」

「分かった。」

久保は指示を預かり、対戦の場へと向かった。

「教科選択権はそっちが使っていいよ、姫路さん。」

「分かりました。では、総合教科でお願いします。」

「分かりました。では、始めて下さい。」

(…よし、勝った。)

久保が指示を守ったため、Aクラスの勝利を確信し、勝負には興味を示さなかつた。

「……すまない。負けてしまったよ。」

「いや、いい。さつきも言つたが、選択権を向こうに使わせただけでいいんだ。」

久保は負けたらしく、魁人は指示を守つたからいふと言つ。

「最後の勝負です。代表の方、どうぞ。」

「……はい。」

「俺の出番だな。」

もうろん、両クラスの代表が出る。

「教科はどうしますか？」

「どうする？ 霧島さん。」

魁人は当然のように翔子に聞く。

「俺達が教科を決める。」

「何言つてんだ、雄二。お前らはもう……」

「3回の教科決定権を使い果たしているんだよ。」

「…何？」

「よく考える。まず、始めと4番目で康太、それと姫路さんが使つた。」

「ああ。それだけだ。2回だけだろ？」

「…甘いな。秀吉も使つてるんだよ。」

「はあ？ 秀吉は不戦敗だろ？」

「いや…。嘘だと思つない、記録を見ろ。高橋先生、3回戦の結果をお願いします。」

「分かりました。…出ました。」

古典

Aクラス	Fクラス
木下優子	VS
343点	UNKNOWN

「な？教科が古典になつていてる。なぜなら、秀吉が古典を選び、
フィールドを展開した後に棄権したからな。」

「……くつー」

「まんまと引っかかつたな、雄一。お前じや頭で俺には勝てねえ
よ。」

「クソツッ！」

魁人はFクラスは既に3回教科を選択している、としてAクラス
の教科選択権行使した。

「では、気を取り直して……。教科は何にしますか？」

「……総合教科。」

雄一がまともな勝負で翔子に勝てるはずも無く、Aクラスの勝利
が確定した。

第1-3話 A対F！最下層からの挑戦～後編～（後書き）

策で上がってきたFクラスを策で落とす。

ちょっと鬼畜です。

次は試合戦争後の出来事です。

今回は1回本文消えるしP.C1回壊れるし、大変だった…。

紫苑さん、誤字報告、ありがとうございました！

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第1-4話 試合戦帝騒ぐ、終焉。（前編）

明日実力テストなのに何やつてんでしょうか？
では、どうぞ。

第14話 試召戦争騒ぎ、終焉。

「3対2でAクラスの勝利です。」

高橋先生が結果を宣言する。

「……雄一、私の勝ち。」

「クソツ……！」

雄一は策を使つことすら出来なかつたことが悔しいのか、唇をかんでいる。

「しあがないよ。魁人の方が一枚上手だつたんだから。」

「ほう。明久でも上手つて言葉を知つていたのか?」

「だからそこまで馬鹿じゃないって?！」

明久が雄一を慰めると、魁人はそれを茶化す。

「……ところで、約束。」

「……（カチャカチャカチャ！）」

康太は凄まじい勢いでカメラのセッティングをしている。

「康太、何してんだ？そんなに人の告白シーンを撮りたいのか？」

「は？」

魁人は翔子が何を言おうとしているのか分かるらしく、明久は意味が分からぬよう首をかしげている。

「わかつてゐる。何でも言え。」

「……それじゃ……」

「……雄一、私と付き合つて。」

予想しなかつた出来事に、皆固まつてゐる。

動けるのは3人。

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか。」

予想できていた相手。

「……私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き。」

告白した本人。

「やつぱりか。なんとなく分かつてたけどな。」

そして、それに気づいていた傍観者の3人である。

「その話は何度も断つただろ？他の男と付き合ひの気はないのか？」

「……私には雄一しかいない。他の人なんて、興味ない。」

「良かつたな、雄一。こんなに愛してくれる人、他にはいないぞ？」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあー放せーやつぱいの話はなかつたことに」「いいから行って来い。」「ぐふつ？！」

抵抗する雄一に魁人はボディーブローを食らわせ、黙らせる。

「じゃ、霧島さんいつでもしゃべれ。楽しんでこい。」

「……ありがとう。緑野はいい人。」

そう言つて、翔子は雄一を連れ（ひきずり）、教室を出て行つた。

「さて、あとはお願ひします、西村先生。いますよね？」

「…なんで分かるんだ？」

魁人は廊下に西村先生がいることが分かつていていたようだ、呼びかける。

「話はあなたのFクラスでして下さい…。」（）だと邪魔なんで。

「そのことまで分かつているとは…。まあ、いい。さてお前ら、
我がAクラスについて話がある。教室は行くぞ。」

「は？ 我が？」

「いいから行って来い。話があるよつだからな。」

明久はまた首をかしげているが、魁人が無理矢理送り出す。

「さて、皆、苦労だった。今日はまつ終わりだ。帰つていいぞ。」

Aクラスの皆が再起した頃に、魁人は言つ。

「あの、縁野くん…？」

「ん？木下さんか。どうした？」

「ちよつといい？」

「まあ、いいが…」

優子は魁人を教室の隅へ連れて行く。

Aクラスは広いため、端にいると、あまり目立たない。

「で、どうした？」

「…縁野くんは、秀吉のこと、知っていたの？」

優子は自分の不安について魁人に聞きたいことがあるらしい。

「ああ、知つてた。明久とよく一緒にいたからな。そのとき話したりした。」

やはり魁人は秀吉を知っていたようで、理由を話す。

「じゃあ、…じゃあ何でアタシにあそこまで優しくしてくれるのよ

？」

「ん~どうこうことだ？」

「何で秀吉がいるのに、アタシにあそこまで構ってくれるのよ

！」

優子は涙を流し、つかみかかりそうな勢いで魁人に聞く。

「はあ？ 何言つてんだ？」

「だって、そうじやない！ 皆、皆秀吉のこと知るとアタシから離れていった！ アタシより秀吉の方がかわいいってね！」

「木下さん、少し落ち着け…。」

「何で、何でよ？！ 緑野くんだって、そう思つてゐんじやないの？！ アタシに構つてくれるのだって、アタシが秀吉に似てるからでしょ？！ それだったら、アタシは…。」

「一回、落ち着けつて…。」

「…？！」

魁人はなだめるように優子を優しく抱きしめる。

「今までのやつがどうだったかは知らないけどな、少なくとも俺はそんなにつまらないことで木下さんから離れたりはしない。そもそもアイツは男だしな。何があったとしても、木下さんは木下さんだ。秀吉の代わりなんかじゃない。もつと自分に自信を持つたらどうだ？」

魁人は優子に優しくそつと言つ。

「緑野くん…。うわああああん…！」

優子は今まで溜まっていた不安を全部流すよつこ、泣き続けた。

「……」めんね？取り乱して……。」

「いや、構わないわ。木下さんの役に立てたなら、別にな。」

魁人は笑顔でそう言つ。

「……やつぱり、アナタを好きになつてよかつた……。」

「ん？何か言つたか？」

優子は小さい声で呟くと、少し笑みを浮かべる。

「いや、何でもないわ。」

「そうか？」

魁人には聞こえなかつたようですね。

「そういえば、斬りの話……。」

「ああ、そうだったな。何をすればいいんだ？」

優子は思に出したよつて言ひへ。

「えうね……。今度の土曜日、ちよつとお会いにならへる。」

「ん、別にいいが……。それだけでいいのか？」

「ええ。……詳しいことま後でメールするわ。じゃあ、今田はありがとう。じゃあな。」

「ああ、じゃあな。」

やう言ひて、優子は帰つていつた。

「魁人くんつー。」

「ん、今度は美穂か。どうかしたか？」

美穂は今のことを見つめ、黙り寄つて来る。

「今度の田曜日、空こりますか？」

「ん、まあ、空こてるが……。どうした？」

「ちよつと、一回だけ会つてください……。」

美穂は聞いていたらしく、自分も誘おうと思つたらしい。

「別に構わない。それだけか？」

「はい。じゃあ、帰りましょう。」

美穂も約束を取り付けると、用は済んだようで、2人は帰つていつた。

1Jの日をもつて、Eクラス中心の試合戦争騒ぎは終焉を迎えた。

第1-4話 試召戦争騒動、終焉。（後編）

はい、やつと1巻の内容終わりました。

次は：2人とのトーク編をやるか、そのまま2巻に入るか、迷っています。

誰か、意見を下さる人がいればいいんですが…。

そんな親切な人、いるかなあ。w

とりあえず、意見募集します。

この頃思つた。

美穂のキャラ、壊しそうか？w

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございましたー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7700y/>

バカと居眠りとAクラス

2011年12月1日18時52分発行